Female Education Considered : Nineteenth- Century Britain

Edited and Introduced by Setsuko KAGAWA
Published by Thoemmes Press and Edition Synapse, 2002
「ヴィクトリア時代女性教育論集」　編集・解説　香川　せつ子

昨春より刊行が開始された本叢書は、19 世紀英国の女性教育に関する基本文献・資料の復刻版である。イギリスの女子教育論といえば真っ先に連想するのは、18 世紀末の Mary Wollstonecraft や Hanna More、あるいは 19 世紀女子高等教育運動のパイオニア、Emily Davies のそれであろう。しかし、本叢書では、彼女たち以外の、従来の女子教育史ではマイナーな位置にあった文筆家の著作に目配りし、当時の女性教育の全体像を俯瞰できるようにした。各巻の紹介は後にして、まず日本でのイギリス女子教育史研究をめぐる状況や本叢書が発刊された経緯について語らせていただく。1980 年代の初頭、私がイギリス女子教育史の研究を思い立った当時、わが国の教育史研究において「女子教育」はようやく「周辺の研究領域」として認知され始めたばかりの時期であった。外国の女子教育史研究はきわめて少なく、梅根悟監修『世界教育史大系』シリーズ中の、志村鏡一郎氏の編集・執筆による『女子教育史』（講談社　1977 年）がほとんど唯一のものであった。「イギリス女子教育史を研究テーマとしてやっていける」と思えたのは、歴史学や社会思想史の分野において、水田珠枝氏や河村貞枝氏による先駆的な研究があったからこそである。

両氏の研究を手がかりに、女性史、女子教育史に関する文献収集を開始してみると、イギリス本国そして女性学の本場アメリカ合衆国では、1970 年代以降に夥しい数の研究書や論文が発表されているのを知って驚いた。先行研究や資料に恵まれて、いやある時にはむしろ資料に溺れそうになったり、また英米での研究をフォローするだけで精一杯という状況のなかで、今日まで細々と研究を続けてきたのだが、そうしたなかで、常に心の隅で気がかかりな存在となっている文献があった。先行研究で頻繁に引用されながら私自身は未だ目を通すことができずにいる同時代の著作、あちこち手を尽くしたがとうとう入手できずに終わった原資料…などである。Barbara Kanner によるイギリス女性史のビブリオグラフィー、Women in English Social History 1800-1914 : A Guide to Research が Garland 社より 1990 年に刊行されたが、教育の分野に限っても実に膨大な文献が列記されており、未読資料に目を通したいとの想いはますます切迫したものになっていた。

そんな時に、Thoemmes Press 社と日本シノップス社との共同による「19 世紀英国の女性教育に関する基本文献」の復刻出版の話を伺った。2001 年に刊行された広島大学の安原義仁氏の編集による University Reform in Great Britain（英国大学改革史）の後続の企画としてご紹介を頂いた。早速、収録文献候補目録の作成にかかったが、前々

より目をつけていた文献を中心にリスト・アップしたことは言うまでもない。もちろん手持ちの資料で重要と思われるものは列挙した。Kanner のビブリオグラフィーは当時の文献のほぼすべてを網羅する優れた業績であり、そこからその他の文献を絞っていった。この作業の過程で、かつて私が British Library からコピーで取り寄せた Emily Davies の女子高等教育に関する文献や第一波フェミニストたちの女子教育をめぐる諸論稿は、ここ十数年間にかなりの部分が復刻出版されていることを確認し、この分野の研究の拡大を改めて実感した。

そこで、本叢書では、すでに復刻済みの文献をまず除外し、残る重要文献の中から入手困難なものを中心に収録することにした。その際、いわゆる改革派に属する知識人や女子教育家の理論のみならず、伝統的女性観を鼓舞する諸言説や、通俗的なアドヴァイス・ブックを含めて、女子教育の諸相を様々な角度から考察することを助ける基本資料集となるよう配慮した。しかし、第一次候補に挙げた資料がすべて英国で復刻可能な状態で入手できるとは限らず、そうかと思えば日本の大学図書館にほとんど損傷のない形で保存されているものもあったりで、文献収集の過程では落胆したり、反対にわくわくする体験をした。完成した復刻版は、印刷、装丁ともに綺麗な仕上がりで、精巧な技術にまた感嘆させられた。第 1 回配本は、以下の 6 巻からなっている。

第 1 巻は、当時流行した女性作家による中流階級の女性むけアドヴァイス・ブックのひとつ Elizabeth Sandford, Woman, in her Social and Domestic Character, 1831 を収録している。国教会牧師の妻であった彼女は、女性がその領分たるべき家庭において家族への精神的影響力を発揮するために、身につけておくべき教養について諭した。

第 2 巻は、女性のための最初の知的教育機関として著名なクィーンズ・カレッジの初代校長であり、その後の女子教育の進展に強い影響力をもった Frederick Denison Maurice の講演を 2 編収録している。同カレッジの開講講演にあたる Queen's College, London—Its Objects and Methods, 1848 と、ロンドン労働者カレッジでの講演 Lectures to Ladies on Practical Subjects, 1855 とである。

第 3 巻は、女性教育全国連合の提唱者であると同時にフレーベル主義者でもあった Emily Shireff の著作から、Intellectual Education, and its Influence on the Happiness and Character of Women, 1858 を収録した。軍人家庭の娘として家庭での自己教育を通して成長した彼女は、性差を超えた知的な教育が、女性の人生のみならず人類全体に幸福をもたらす契機となることを力説している。

第 4 巻－ 5 巻は、児童小説作家として著名な Elizabeth Missing Sewell の Principles of Education, Drawn from Nature and Revelation, and Applied to Female Education in the Upper Classes, 1865 で構成される。近代的な女子学校システムに反対する彼女は、家庭やそれに類似した小規模の学校こそ理想的な女子教育の場であると主張し、宗教教育と道徳教育を主軸とする女子教育論を展開した。

第 6 巻は、女性向けアドヴァイス・ブックのベストセラー作家、Sarah Stickney Ellis

の Education of the Heart: Woman's Best Work, 1869 を収録している。19 世紀前半にドメスティック・イデオロギーを鼓舞する女性論を多数発表した彼女は、本書中で「人類の母」たる役割の重要性を説き、その文脈において女性への知的教育を支持している。

以上が、第 1 回配本の概要である。続いて、第 2 回配本 Governess Education、第 3 回配本 The Mother: Education in the Home が、2003 年に刊行される予定である。近年、イギリス女子教育史に関心を寄せる研究者が、教育史のみならず社会史、英文学の領域で若い世代を中心に増加し、日本でも研究の進展が目覚ましい。本資料集の刊行後、何人かの先生より「卒論や修論で、この分野をテーマにする学生がいるので、大学図書館で購入した」という嬉しい話を聞かせていただいた。本叢書が、今後のイギリス女子教育史研究の発展に、いささかなりとも貢献できればと願っている。

（香川せつ子）